

■ 書 評



統合失調症が秘密の扉をあけるまで
—新しい治療法の発見は、一臨床家の研究から生まれたい—

糸川昌成 著
星和書店
2014年3月 132頁
本体価格 1,400円+税

本書『統合失調症が秘密の扉をあけるまで』は、2013年に同じ星和書店から発行された『臨床家がなぜ研究をするのか—精神科医が20年の研究の足跡を振り返るとき—』のいわば続編にあたる。前作のエッセンスは本書の中にも多少ながら盛り込まれているが、やはり前作を読まれていない諸兄には是非一度手に取って、併せて通読することを勧めたい。

さて日本における医学研究を概観するに、基礎研究の分野では世界的な発見や業績を見出している研究者は少なくない。一方で、臨床医学の分野では精神医学にその範囲を限らなくとも、欧米諸外国の後塵を拝している観は否めない。さらに、将来の医学研究を担う若手医師や医学生の中でも、外国留学を通じて知見を広める意欲のある者は減少し、そもそも研究活動に興味を抱かない者が増えている。このままでは日本の医学研究は世界の時流から取り残されるのではないかと、将来を案じる声はしばしば聞かれる。

その流れに歯止めをかけるための妙案はあるのか。医学生・研修医に対する初期教育の充実や大学院教育の改革も叫ばれているが、臨床研究活動の意義深さや学問としての純粋な興味深さ、面白さを生き生きと彼らに伝える教材が必要である。本書はまさにその任に相応しい作品と言える。

著者は、医師免許を取得した後、大学病院の医局に入局して研修医生活を始める。その後、東北地方の単科精神病院で常勤医を勤めながら統合失調症の遺伝子研究を行うという形で研究生活をスタートさせる。数年経ってアメリカ留学の機会を得るが、かの地で「数を集めれば真実が見えるはずだ」という「原理主義的とも、定理への徹底した志向性」とも呼べる発想

に基づく研究スタイルを目にしたことで、逆に個別性を重視する研究手法への着想を得る。

「単一の原因ですべてを説明できるはずだという原理主義的確信……。目もくらむような検体数ですべてのゲノムを一気に解析しようという（中略）欧米型のビッグサイエンスと日本型の個別差に目を配る零細研究の違いに思いをはせていると（中略）むしろ個別の症例に立ち返る研究こそが、統合失調症という混沌とした症候群を解明するためには必要なのだ。」

この一節には、欧米型の大規模研究と比較して日本型の個別研究が世界の潮流の中で生き残っていくためのヒントが提示されている。それと同時に、基礎科学者ではなく単なる臨床医でもない生き方がある、すなわち患者と直に接しその臨床的な特徴をつぶさに観察できるからこそ臨床医が研究をする意義があるという、基礎科学と臨床医学の両方に立脚して臨床研究を行うことの学問的な意義もこめられている。著者が指導教授であった融道男先生から受け継いだ「答えはすべて患者さんのなかにある」という言葉の重さ、それを知ることができるだけでも、医学生や基礎研究・臨床研究に興味を持つ若手医師にとって、自らのロールモデルを提示してくれる作品となろう。

そして、「臨床家と基礎科学者がお互いの違いを尊重しあったときこそ、疾患研究にブレイクスルーが生まれる、（中略）異質な発想を受容するには一定の努力とマナーが必要ではあるが、意識して異種性の受容に努めた結果得られた多様な発想からは、均質な枠組みからは到底到達しえない斬新な発見が生まれる」という著者の思想の背景には、精神障害を有していても治療やりハビリを経て就労や就学が可能となりリカバリーを成し遂げていく社会、健常者も障害を持つ当事者も多様な人々が共に生きられる社会、そういう異種性に溢れ異種性を受容する社会の実現を願う想いがこめられていると思われる。統合失調症の母を持つ当事者家族であり、臨床精神科医であり、臨床医学研究者でもあるという内なる多様性を秘めた著者ならではの願いの発露ではないだろうか。

(管 心)